

永井荷風論

飯島耕一

永井荷風論

定價一三〇〇円

©一九八二

昭和五十七年十二月十日初版印刷
昭和五十七年十二月二十日初版発行

著者 飯島耕一

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋一丁目一七
振替 東京二三四
検印廃止

永井荷風論

序章

1

萩原朔太郎に名高い「旅上」という詩がある。

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくとき

みづいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしのめ

うら若草のもえいづる心まかせに。

誰でも知っている名高い詩であるが、この詩はひょっとして、荷風の『ふらんす物語』に刺激を受けて書かれたものなのではあるまいか。「旅上」は白秋の雑誌「^{ザムボウ}朱鸞」の大正二年五月号に発表され、のち大正十四年になって詩集『純情小曲集』に収められた。

荷風の『ふらんす物語』は明治四十二年三月、博文館から発行される手筈になっていたが、出版届の当日、当局によって発売禁止となるという憂目を見た。しかし単行本となる以前に、すでに十四篇が明治四十一、四十二年の両年にわたって諸雑誌に発表されており（多くは『ふらんす日記』より、とされていた）、また「橡の落葉」の四篇は、発禁の翌年の明治四十三年六月に、「三田文学」第一巻第二号に掲載されていた。荷風はそれへのそえがきとして次のように書いた。「左に掲げる小品文数篇は一度『ふらんす物語』中に印刷されたものなれど、未だ何処の雑誌にも載せたる事なく、従つて同書の発売禁止と共に世人の目に触るゝ事なく埋葬せられるものなり。今この旧稿を取出して三田文学余白の埋め草となす」。

明治四十三年、荷風は三十一歳である。

同じ年、朔太郎はまだ二十五歳で、この「三田文学」の出た前々月である四月に、慶応義塾大学予科一年に入学し、すぐに退学している。これは朔太郎の旧制六高在学中のことで、この形だ

けの慶応への入退学はまったく奇妙であるが、ともかく荷風が教授として在籍していた慶応へ入学はしているのである。そして翌四十四年の五月に、慶応へ再入学し、これもその年の十一月に退学している。

さきほどの「旅上」は大正二年の作であり、『新編ふらんす物語』が博文館から強行出版されたのは大正四年十二月であるが、朔太郎はさきの「三田文学」で、あるいはそれ以前の諸雑誌で、『ふらんす物語』の一部を読んでいたのではなからうか。これは単なる想像だが、あの「ふらんすへ行きたしと思へども」で名高い「旅上」が、『ふらんす物語』の影響で書かれたと考えることは楽しい。

わたしはさきに長い朔太郎論（『萩原朔太郎』角川書店）を書いたが、こうして荷風と朔太郎という遠く離れたかに見える二人は結びつかないわけではない。朔太郎は荷風と因縁の深い谷崎潤一郎とは親しかった。

またわたしはこれも長い西脇順三郎論（『田園に異神あり』集英社）を書いたが、西脇氏も三田のキャンパスで、教授としての荷風を見かけたことがあると語っている。

西脇氏は明治四十五年に慶応義塾に入った。年譜によると「家人の説得により、上級学校への進学を決心し、四月、第一高等学校を受験。但し入学試験は英語のみ受験し、あとは放棄、シェイクスピアの『真夏の夜の夢』を一高の庭で読んでいた。九月、慶応義塾大学理財科予科入学。英語への情熱いっそう昂まり、ヘンリー・スイートの英文法書やアーヴィングの『スケッチ・ブック』を愛読する」。

明治四十五年の西脇氏は、まだ十九歳の若さである。翌年理財科本科に進む。(荷風も一高受験は放棄し、当時の外語の清語科へ入ったわけである)。

荷風は大正五年まで慶応の教授をし「三田文学」の編集をしているので、むしろこの時(西脇氏の学生の頃)も慶応の教授である。

比較的最近のことだが、西脇氏は口頭で突然次のように言われた。「ボードレール(西脇氏はエッセイではポオドレルと表記するが)の『悪の華』というのはね、何を言ってるかという、病氣の話をしているわけですね。『Les Fleurs du mal』の mal は病氣のことで、荷風の『地獄の花』とか、ああいうものに通じている。mal は悪でもあり病氣でもある。『悪の華』は、近代の精神の病氣の詩を集めた集とも見做し得る。ともあれ荷風の『地獄の花』という題名が、あの西脇氏の口から出て来たことにわたしは少し驚いた。『地獄の花』は、言うまでもなく明治三十五年の荷風のゾライスムによる暗黒小説で、本稿でものちに論じるつもりだが、この西脇氏のことばに力を得て、わたしはさらに「荷風に会われたことがあるか」と質問してみた。

「ないな、荷風とは」と氏は言った。「見たことはある。僕は慶応義塾の学生だった頃、彼は雪駄をはいて、こうもり傘をさしていた。『昔の写真を見ると、よく洋服を着て、大きなボヘミアン・タイをしめたりしていますね』と口をはさむと、西脇氏は笑って『洋服着たって駄目ですよ。荷風はダンディじゃない。ダンディと思っているかもしれないが』と言われた。

西脇氏がとりわけ荷風に関心があるとは言えない。しかし『Ambarvalia』の詩人西脇氏の口から、『地獄の花』という題名が出て来たのには少し驚かされた。しかし『旅人かへらず』の西

脇氏となると荷風と非常にかけ離れているわけではない。

話はそこから荷風とヴェルレーヌのことに移り、ついでヴェルレーヌの蕙の葉の出て来る詩をジョイスが好きだったと言われた。これは多分ヴェルレーヌ初期の『サチュルニアン詩集』所収「三とせの後」という詩のことで、堀口大學訳で示せば次のような詩である。

三とせの後

朽ちて危い柴の戸押して

小さな園へ僕は入った

朝の日かげはやさしくあたりを照らし

花の一つ一つに露がきらめいた。

何一つ變らなかつた。あの日のままのすべてを僕は見出した、

生えからむ蕙の青葉のトンネルと、その下の籐の椅子……

噴水は今日もなほ昔のままに、銀いろにささやいて。

果しない嘆きの歌を歌ひつづける一本の老木ひともとの柳おいぎ。

薔薇ばらの花昔のままにわななけば、昔のままに

ほこりかに、百合の花、風にゆれ。

行来する雲雀さへ昔のそれと變らない。

あまつさへ僕は見出すのであつた、並木の奥に残されて

昔のままに石膏の剥げ落ちたヴェレダの像を

――木犀草の花のたよりない香りの中にはなくも。

長々と引用したが、この詩をジョイスも好んだかもしれないが、荷風ももっとも愛好したであろうと思うからである。『珊瑚集』で荷風が訳したポール・ヴェルレーヌ（荷風はポール・ヴェルレーヌと表記している）は、「びあの」「ましろの月」「道行」「夜の小鳥」「暖き火のほとり」「返らぬむかし」「偶成」の七篇であるが、荷風は必ずやこの「三とせの後」の原詩も愛読愛誦したはずで、この詩はまったく荷風好みであると言えるであらう。詩人としての杖を曳いて、このような「園」に入ることこそ、生涯荷風は生きる目的としたのではなかったか。『ふらんす物語』にもこれと相似た情景が見出されるが、隅田川のほとりにも、「何一つ變らなかつた。あの日のままのすべてを僕は見出した、生えからむ鳶の青葉のトンネルと、その下の籐の椅子……」と嘆じ得る世界を求めて、一生荷風は歩き、そして *voyeur*、つまり覗き見る人として見ようとしたのではなからうか。

ヴェルレーヌをいま堀口大學訳で読んだが、荷風と堀口大學の二人は縁が深い。このことにつ

いては「荷風・大學・ヴェルレーヌ」と題してすでに小文を草したことがあるが、『堀口大學全集』第二巻月報、『断腸亭日乗』を一度でもひもといたことのある人は、あちらにもこちらにも堀口大學の名が出てくるのを記憶していよう。それは大正七年正月二十日、堀口大學が「其著昨日の花の序」を請うて以来、昭和三十三年十二月三十一日、堀口大學の葉山の住所を荷風が日記に書きとめるまでつづく。昭和三十一年十二月廿七日には「晴。午後浅草。不在中堀口大學氏来訪。葡萄酒惠贈」とある。荷風が亡くなったのは昭和三十四年四月三十日であるから、きわめて晩年近くまで、荷風・大學の交際はつづいていた。

生前堀口大學は、「私は師に恵まれました」と言うのが口癖で、ついで、「與謝野鉄幹、晶子先生、永井荷風先生」と三人の名をあげ、「友としては佐藤春夫君」とつづけるのがつねだったが、荷風とはやはり三田において知り合ったのだった。このことは岩波の「荷風全集」月報「師恩に思う」に詳しいので引用してみよう。明治末年の荷風の姿が青年堀口大學の眼によって明るく素直に捉えられている。ここには志賀直哉が、「荷風はいろいろのことに対して、被害者意識が強すぎる」と語っている（やはり岩波の全集月報）ような荷風はない。そしてついでに言えば志賀のこの発言は、よく荷風の急所を突いたものと思われるのである。志賀のこのことは記憶に価するだろう。（ところで志賀もまた、荷風のボヘミアン・タイや非常に高いカラーは、あまりに文字通りのハイカラで、却っておかしかったとしている）。

さて堀口大學は次のように昔を想起している。

「その頃（明治四十三年）（『ふらんす物語』発禁の翌年のことである——引用者）、三田の丘の上には、

建物はまだまばらで、いたずらに銀杏の大樹だけが品川沖からの海風につやのよい葉をひらめかせていた。塾監局と呼ばれている教務兼教員室と教室のある建物とは、渡り廊下でつながれていたが、或る日、いつも一緒の佐藤春夫君と僕は、その腰板によりかかって、日向ぼっこをしていた。たまたま通りかかれた荷風先生は、僕らがそこにいるとごらんになると、立ちどまりになって、あの持ちまえの、露したたらんばかりと形容したいほど、温情のこもった微笑と一緒におっしゃったものだ、

へ君たちは『スバル』に書いているんだってね。今度何か出来たら見せてくれ給え、『三田文学』にものせたいから。』

（中略）五十余年をすぎた今日、僕があゝの時の先生のお声を、空から落ちて来た天使の声のように、大切に耳の奥にしまっているのも不思議はあるまい。

この「露したたらんばかりと形容したいほど、温情のこもった微笑」とある荷風像は、これまでの多くの荷風論の荷風のイメージにはあまりないものである。わたしは志賀直哉の「荷風はいろいろのことに對して、被害者意識が強すぎる」という觀察と、この堀口大學の「露したたらんばかりの微笑」の思い出の二つを、とりあえずの手がかりにして、荷風を今日の眼で読みなおしてみたいと思う。荷風のうちにはたえず二つの相反するものがあつたと思われるが、それは今後いろいろな形で見られるだろう。

たまたま頼尊清隆『ある文芸記者の回想』（一九八一年）に収められた「永井荷風のこと」を読み、その「さびしい葬儀」という一篇に衝撃に似たものを覚えさせられた。そこにあつては荷風

の晩年の悲惨とも言うべきエピソードが語られ、文壇人も現われず、新聞記者と少数のつめたい親戚しか集まらぬ通夜の模様がスケッチされている。霊柩車を見送ったのもぎつりとつまった街の人たちがほとんど（会葬者は三百人ほどだったようだ）、「ただ、葬儀の日に、荷風の『葛飾情話』のヒロインだったという老女が最後の対面をするので棺をあけたとき、へまあ、きれい、まるで、先生、生きていらっしやるみたい」と思わず涙にむせんなのが、ただひとつ、人の死を葬う暖かい光景であった」と頼尊氏は書いている。これまでも荷風の死の前後の孤独悲惨は語られているし、当時（六〇年安保の前年）、わたしもテレビや新聞報道で荷風の死にショックを受けていたが、頼尊氏の記事は、一九八一年の現在で眼で見るとき、また別様の異様さをもって迫るものだった。

一八九六年（明治二十九年にあたる）、下層の娼婦ユージェニー・克蘭ツのパリ、デカルト街の部屋で死んだヴェルレーヌの晩年も悲惨なものだった。荷風の「露したたらんばかりの微笑」と「被害者意識」の他に、もう一つ戦中の体験も含めて、その「悲惨」への傾斜、あるいは「悲惨」への好みも、すでに初期小説から現われているはずで、それをも見てみたい。荷風の明治三十年代の小説は、これを未熟として重要視せず、『あめりか物語』『ふらんす物語』以後に限って荷風を見る評者も少なくないが、「おぼろ夜」「野心」などから、「闇の叫び」「地獄の花」「新任知事」「庭の夜露」などの、「暗黒」好み「悲惨」好みの荷風は再点検に価すると思われる。

それにまた、わたしは元々の荷風びいきというわけではなく、むしろ荷風は嫌いであった。わたしはボードレールを読むかたわら、ポール・エリュアールを久しく愛好した時期を持っているが、その対社会観をとりあげても対女性観をとって見ても、およそ荷風とエリュアールほど異質の存在はない。詩人の肉感的な感性（サンシユアリテ）という点にしばらく、荷風、エリュアールに共通点は見出されなくはない。しかし社会への責任意識、女性への恋愛の一途さはエリュアールのものであって、荷風のものではない。むしろ荷風には女性への侮蔑的態度さえあり、また社会正義からの逃避が一貫して荷風にはある。この荷風によりやく四十代半ばからつよい興味を持ちはじめ、「正義の人」エリュアールに、極端に言えばあるうとましささえ覚えるようになったわたしの問題の解明もまた、この荷風論の目的の一つである。久保田万太郎は「中央公論」昭和三十四年七月号——荷風追悼特集で、荷風の孤独は「真にへ自由」を愛した人の孤独であったとしているが、この「自由」とは何なのか。ポール・エリュアールがただ一人の愛する女と同志と共にいる「自由」と、どう位相を異にするのかを見究めなくてはならない。荷風の「自由」は「亡命者の自由」だったとは言えそうだが（荷風の死後すぐの新聞追悼記事で、舟橋聖一は「一生を通じて氏の文学はついに亡命の文学だった」としている）、しかしまだ明確な考えはつかめていないのであって、この荷風論を書くことによって何か手がかりをつかめたなら、というのが偽らぬところである。

またわたしは、言ってみれば戦後まもなく堀口大學訳のフランス詩によって文学に開眼させられた一人だったのであり、「堀口大學の日本語」に与えられた影響が非常に大きかったと思っている。戦後三十年近く、「堀口大學の訳詩の日本語」の内部にあったと言つてよい。むろん西脇順三郎、金子光晴、富永太郎、瀧口修造と多くの詩人の日本語につよく引かれるものを覚えはしたが、これらの詩人たちも大きくとつて「堀口大學の日本語」と近いところにある日本語の詩人たちと言つてよいのではないか。そしていま、わたしは堀口大學以前の、堀口大學が師の一人とする、荷風の日本語に向き合い、それに引かれるものを覚えていくことになる。久しく『月下の一群』の日本語に眼を向けていたのが、『珊瑚集』の日本語に相對していてもよさそうである。荷風の日本語は何よりもそのメロディでわたしを酩酊させる。荷風の日本語もまず言文一致としていいが、この言文一致は、言文一致に疑いを抱きつつの言文一致ではないのか。『溼東綺譚』で帯葉翁とわたしが語り合うところで、二人は「言文一致でも鷗外先生のものだけは、朗吟する事ができますね」と意気投合するが、ここには言文一致を疑いながらも言文一致で行くしかない荷風の態度が見てとれる。朗吟できるとはメロディある文章のことでもある。わたしは『月下の一群』以来の昭和期の言文一致にこれまで大きな疑いを持たずに来たが、初期の言文一致の緊張感を失った、いわば慣れ切った今日の言文一致には疑いを持ちはじめた。ひょっとして今後新しい、めざましい文体の詩や小説が現われるとしたら、それは別のメロディをもった、新しい言文不一致による文体なのではないかとさえ予測しないではないられない。萩原朔太郎の詩がいまなお新鮮に感じられるのは、萩原の詩が初期の文語と口語の間の緊張を失っていないからで

はないか。

荷風の小説の面白味の大きな部分も、この言文一致を疑いながらの言文一致というところに求められるかもしれないのである。散文ながら荷風の文章には音楽があると言うこともできる。それは「まず音楽、その余は文学のみ」と喝破したヴェルレーヌの「音楽」の流れのうちに置いてもよい。

たとえばヴェルレーヌの「La lune blanche」は堀口訳では「白き月かげ」であるが、荷風訳では「ましろの月」であり、題名からしてある酩酊感を読者に与える。現代詩の作者なら「白月」と訳すだろう。「あゝ愛するものよといふ」という荷風訳は、堀口訳では「おお、愛人よ聴きたまへ」となり、最終部はそれぞれ次のようになる。

やさしくも、果し知られぬ

しづけさは、

月の光の色に浸む

夜の空より落ちかゝる。

あゝ、うつくしの夜や。

(荷風訳)

やさしくも深き心の

なごやかさ

月の光に照り榮ゆる

空より降ると

見ゆるかな……

ああ、この良夜を如何せん。

(堀口訳)

堀口訳もただちに口語訳、言文一致とは言えないが、ことばの深さは荷風訳の側にあり、最終行の「あゝ、うつくしの夜や」のしみじみとした味はわれわれにもよく伝わる。「あゝ、うつくしの夜や」と言える夜を、ヴェルレーヌも荷風も味わうことのできたほとんど最後の文人ではなかったのか。こうした日本語をめぐる問題も、この荷風論で論ずるとまでは行かずとも、よく味わってみたいと思う。

3

さてわたしはしばらく前、広津柳浪の『今戸心中』をはじめて読んだのであるが、これについてはどう言ったものだろうか。初期の荷風について何か言うためにはやはり広津柳浪に触れずに